

探案者たち

The Investigators



水色眼鏡

●はじめに

この物語はアメリカの怪奇小説家H.P.ラヴクラフトの小説を下敷きにしています。

本書の舞台は1920年代、禁酒法下のいわゆる『ローリング・トゥエンティ狂想の20年代』です。当時の世相に鑑み、今日では問題視される差別的な言動や習慣が頻繁に描写されていますが、これはそのような事物が普通であった時代を反映したものです。差別や不健康な習慣を支持したり助長するのが目的ではありません。もしかすると、この本をお読みになる読者の中には、不快に感じられる部分があるかもしれないと、あらかじめお断りしておきます。

また一部にこの時代ではありえない設定や描写も含まれています。

筆者は日本生まれの日本育ちであり、アメリカへ行ったことは一度もなく、英語も話せません。よって作中の描写はあくまで『日本人から見たアメリカのTVドラマ』風な出来事であります。時代考証や会話に不適切な部分が多々あるかと思われませんが、どうかご容赦下さい。

また、当然ながら、この小説はフィクションです。例え実在の人物や事件が描かれたとしても、現実とは何らの関係もありません。すべて筆者の妄想の産物であります。

◆目時

- 1・不可能犯罪課
 - 2・アーカム
 - 3・アーミテッジ教授
 - 4・捜査
 - 5・アーカム市警
 - 6・ウェッジ・バターフィールド
 - 7・ヘルファイア・クラブ
 - 8・ダイアナ・ウェスト
 - 9・遺体
 - 10・作戦会議
 - 11・レッドサーモン
 - 12・マダム・ハーベスト
 - 13・ヘンリー・ライス
 - 14・首吊り人の丘
 - 15・ボストン
 - 16・交霊会
 - 17・誘拐
 - 18・チャップマン農場
 - 19・再び不可能犯罪課
- ★あとかき

◆登場人物◆

- ・ シドニー・ティップス …連邦捜査局（BOI）シカゴ支局の捜査官。不可能犯罪課（Impssible Criminal Investigation Devision）。
- ・ ダイアナ・ウェスト …フリーの記者。『アーカム・アドバタイザー』に寄稿している。
- ・ ウォーレン・ライス …ミスカトニック大学考古学科の教授。
- ・ フランシス・モーガン …同大学の文化人類学博士。

- ・ ルース・ベネディクト …アーミテッジ教授の秘書。
- ・ チップ …ミスカトニック大学附属図書館の番犬。
- ・ ジョン・キングスレー …ミスカトニック大学生。『ヘルファイア・クラブ』の部長。
- ・ マシュー・ベンジャミン …同クラブ員。
- ・ ジェニファー・ドイル …同上。
- ・ クラリッサ・エバンズ …同上。
- ・ ホレイショ・ピカリング …同上。
- ・ ルーク・ウォータース …同上。

- ・ テッド・パットナム …シカゴ支局長。ティップスの上司。
- ・ マーサ・ティップス …ティップスの母親。
- ・ ボブ・マーシー …ティップスの友人
- ・ サイラス・マッコイ …ティップスの元相棒。

- ・ ジェームズ・アチソン …元同僚。
- ・ "シェーバー"フィッツロイ …シカゴギャングの手下。
- ・ ホリー・マクガイア …パットナムの秘書
- ・ J・エドガー・フーヴァー …捜査局長官。

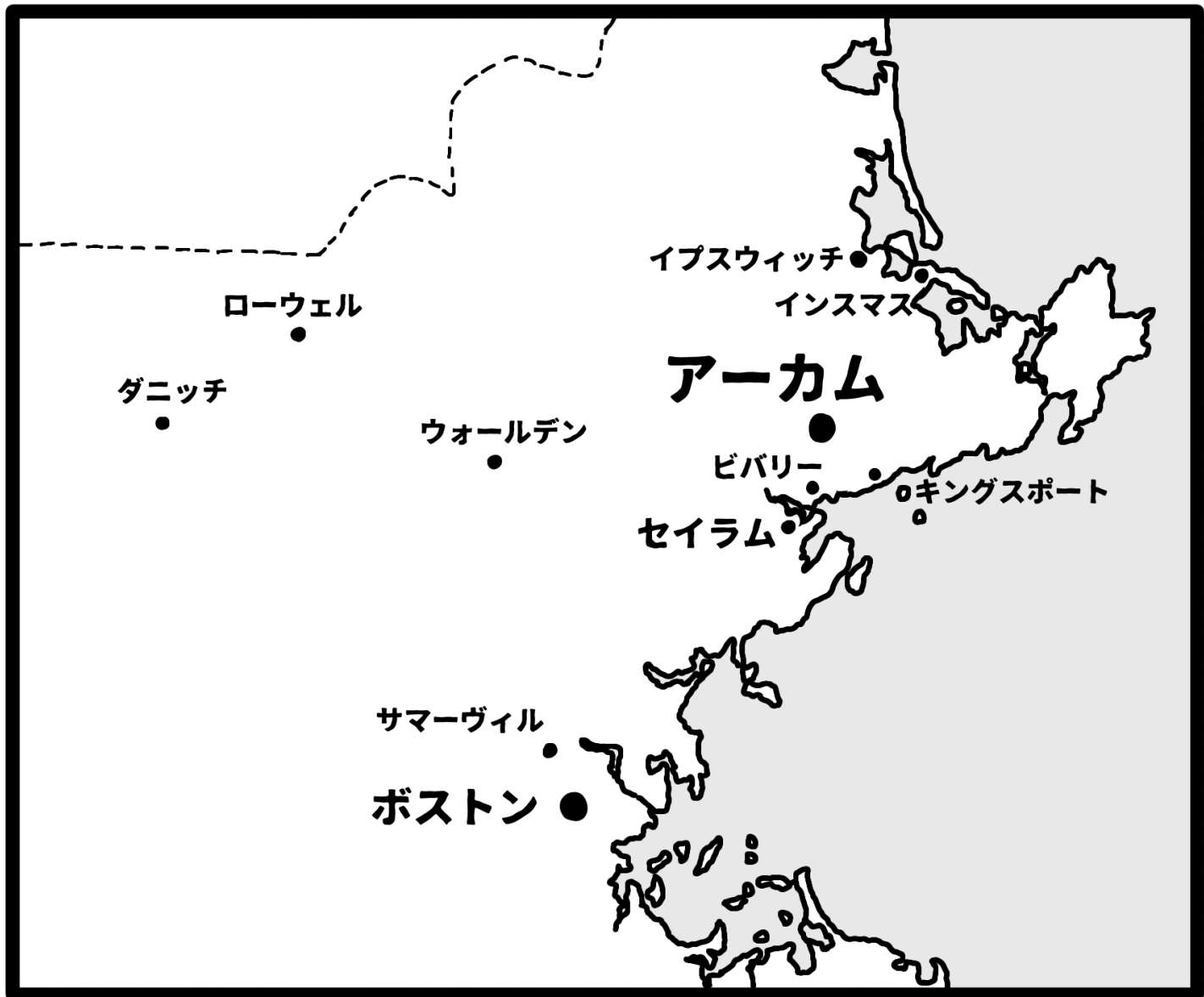
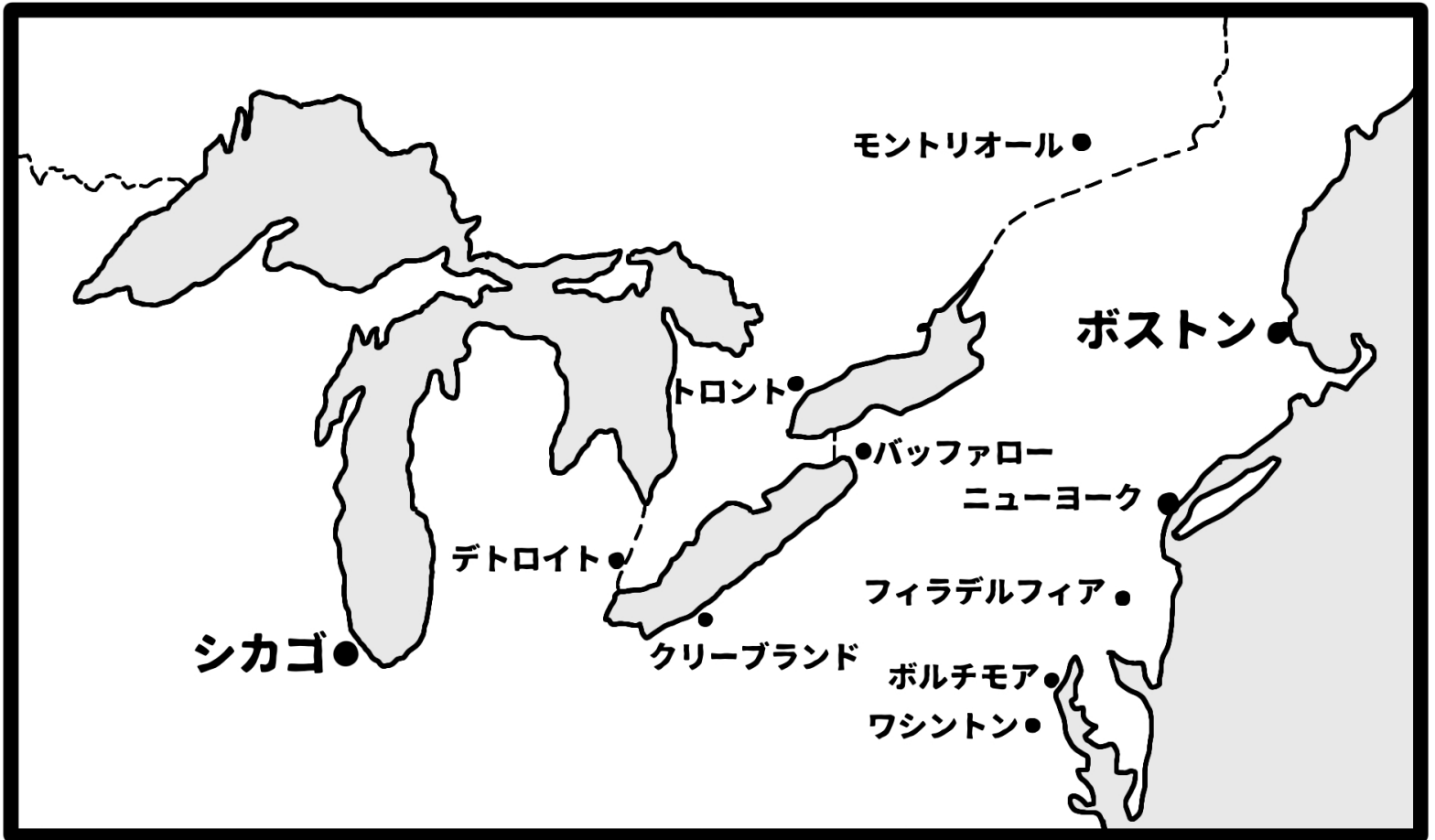
- ・ ルーサー・ギブソン …第一次世界大戦合衆国遠征軍の少尉。ティップスの上官。
- ・ ウェッジ・バターフィールド …『アーカム・アドバタイザー』の事件記者。
- ・ マダム・ハーベスト …占い師。
- ・ ウィリアム・アボット …アマチュア歴史家。

- ・ ダッジ・カイトル …アーカム市警署長。
- ・ ロイ・ブリジェス …同署刑事。
- ・ アボット・チャップリン …同署巡査。
- ・ アーサー・アーノルド …同上。
- ・ ハリソン・ランディ …同上。
- ・ アレックス・クマル …監察医。

- ・ ダニエル・オバノン …アイリッシュ・ギャングのボス。

- ・ チャールズ・ダンフォース …占い師。オカルティスト。

・ヘンリー・マイケル・アーミテッジ …ミスカトニック大学附属図書館長。通称
プロフェッサー
『教授』。



1・不可能犯罪課

ソフト帽のつばがタパリ、と鳴った。

見上げると真っ黒な夜空から白く細い筋を光らせて雨粒が落ちてくる。さっきまで星が見えていたのに。

嫌な予感がする。

こういう、些細なことが、人生を狂わせる時もある。特に今から大掛かりな手入れを行う時にはだ。

俺は帽子を被り直し、襟を立てて首筋を守った。

通りの両端を眺める。はっきりと雨音を立て始めた路面が、ポツンと遠く離れた街灯を受けて黒光りしている。通りの片側はミシガン湖で死んだように黒い。もう片方は湖岸沿いに並んだレンガの倉庫。道の両端に黒塗りのリムジンが2台ずつ、通りをバリケード代わりに塞いでいる。俺が乗ってきたもう1台は真ん中の倉庫の正面に陣取っていた。

雨音が強くなる。リムジンのそばで待機している警官たちがボヤき始めた。

「シド。大丈夫なのか」

リムジンの運転席から同僚のマッコイが聞いた。声が尖っている。

「本当にここで間違いないんだろうな」

「俺が間違ったことがあるか？ 俺には守護天使が憑いてる。心配するな」

実際には俺も小さなヘマをごくたまにしていたし、マッコイと同じくらい苛立っていた。だが、それをわざわざ教えてやる必要もない。

「冗談はよせ。なんなら今解散して、タレコミ屋をしょっ引いて吐かせるよ。そうすりゃ面子も立つし波風も立たんぜ」

俺はドアに持たせかけていた体を回し、開いたウィンドウから中を覗き込んだ。

「そっちこそ冗談はやめてくれ。ハイスクールのガキじゃあるまいし、俺が情報提供者を売ると思うのか。そんな事をすれば、そいつは1日も生き延びられん。第一、誰も俺を信用しなくなる。そうなって欲しいのか」

「そういう意味で言ったんじゃない」

「じゃあどういう意味なんだ」

マッコイはくたびれた顔で首を振った。まだ40過ぎて間もないのに、腹は出て、頭は禿げかかっている。これで鼻の頭が赤かったらアル中かと思うくらいだ。

「シド。俺に嘔みつくな。確かにあんたは優秀だ。けどな、ここはシカゴなんだぜ。なんでも加減ってもんがある」

「加減？」

「やり過ぎるなってことさ。お前さん、ここ半年でデカイ^{ヤマ}事件を3つも解決してるだろう。優秀なのは良い事だ。そりゃ間違いない。けどなあ、出る杭は打たれるもんだ。ほどほどにしておけよ」

これから突入って時に励ましてくれる。俺は唇の端をねじ曲げて、笑みに見えるようにした。上手くはっていないだろうが。

「それは俺がこの暗さじゃ見分けもつかないほど黒いからか？」

「よせよ」

マッコイは首を振ったが、少しばかり強過ぎた。

「肌の色は関係ない。まあ、その、気にする連中はいるが、この場合はそうじゃない。ようするに大人になれってことさ。上とか、検事とか、裁判所とか、あと政治家とか」

「それとマフィアやギャング」

「犯罪が無くないから俺たちは飯を食えるのさ。だろ？ 持ちつ持たれつというか…その辺をな」

「ご高説痛み入る」

俺は再びドアに尻を預け、倉庫の入り口を見張った。そろそろ内通者が出てくる頃だ。そいつはギャングの身内だが、組織の中では端役だった。いわゆるチクリ屋で、誰それが店を出ただの、警官がこの辺りをうろついてるだの、情報の切れっ端を進呈して小銭を稼いでいる。ところが同じ身内の若い与太公が、自分の娘を知らずにレイプしちまったものだから、頭が沸騰したのだ。ボスに訴えたところでまともに聞いてはもらえない。そういう小物だった。

俺はそいつの家族を保護するという約束で今夜の情報を仕入れた。その辺はいつも気を遣っている。周到に隠れ家と逃走費用を準備し、確実に安全な場所で暮らせるよう手配した。失敗したことは一度もない。なぜなら俺は誰も信用していないからだ。俺独自のルートを握っている。

マッコイの言うことはよく分かっていた。

リンカーン大統領が宣言したところで世の中そう簡単には変わらない。黒人の兵士はともかく、警官、とりわけ政府の捜査局 Bureau of Investigation（*FBIの前身）の捜査官ともなると話は別だ。さしずめ俺は突然変異か紛れ込んだ一匹狼といったところだった。ギャングも警官も俺を敵視する奴は多い。『奴隷』が白人を挙げるのだ。連中が睨むのも当然だった。

そうでなくとも今のご時勢では、警察官といえど組織から袖の下を貰うのはある意味常識だった。それどころかもっと上の人間たちにも影響が及んでいる。金は武器になるし、ギャングと顔見知りになれば色々と風通しが良くなる。清廉潔白なお巡りを探そうと思えば瓦礫の山を漁らなきゃならない。

このシカゴで生き延びようと思ったら、それなりの覚悟はいる。

正面の大扉の脇の通用口がソッと開いた。痩せた男が現れる。待機しているリムジンを見ると、自分が包囲されたようにビクツとした。

俺は大股で近づき、倒れないよう彼の肩を掴んだ。5フィート7インチの俺でも、彼は頭半分低い。緊張で頬が必要以上にこけて見える。

「いるんだな、奴ら？」

「…なあ、本当に大丈夫かい」

内通者はオドオドと視線を泳がせた。

「約束は守ってくれるんだろうね」

「ああ、大丈夫だ。だからしっかりしろ。オドンネルは中か」

「奴はいない。『シェーバー』が代わりに仕切ってる」

「手下は何人くらい」

「6、7人」

「よし、あの車に乗れ」

胸ポケットに10ドル札を数枚押し込み、

「手筈どおり動くんだぞ。行き先は誰にも言うな。警察にもだ。家族を失いたくなかったらな」

「そうするよ。…でも、大丈夫なのかい、あんた」

「こっちは上手くやる。あんたの情報が確かならな。それより自分の身を心配しろ」

「黒んぼに良い奴がいるなんてなあ。…ああ、すまん。悪気はないんだよ。ただ俺は…」

返事の代わりに背中を押して車へ促してやる。一瞬蹴飛ばそうかとも思ったが、すぐに馬鹿げた考えを捨てた。男は何度か俺を振り返り「すまんね」と言った。

マッコイに合図すると奴も親指を立てた。リムジンが静かに発進し、闇の中へ消える。

「―――ようし、始めるぞ」

ポンプアクションの金属音が響き、銃弾が装填される。ショットガンやトミーガンを持った市警が寄り集まってきた。こいつらは俺が直々に内定した男たちだ。賄賂も脅しも効かない、シカゴでは絶滅危惧種に認定される人種。

俺のショルダーホルスターにはコルトガバメントが収められている。コマンダーモデルというコンパクトなガンだ。こいつは第一次世界大戦中に上官の少尉から手柄として個人的に贈られた物だった。少尉は気持ちのいい白人の男だったが、砲撃で跡形も無く吹っ飛ばされた。

だがこいつを抜くわけにはいかない。建前上BOIのエージェントは武装を許可されていないのだ。司法長官が俺たちにまともな待遇とまともな仕事を与えるつもりになれば銃も持てるだろう。

俺は組織の脱税を追っていたが、偶然このネタを手に入れた。こいつを使わない手はない。

通用口を用心深く開け、中の様子を探る。真っ暗でほとんど見通しが利かない。足音を立てないように滑り込む。懐中電灯は持っていたが、いざという時まで使いたくなかった。

手探りで進む。木箱に触れるが、中身はおが屑に包まれたただの傘だ。東洋の輸入品らしい。その辺はあらかじめ確認していた。押収品^{フツ}はもっと奥に隠されている。

…どこからか音がする。

ほんの微かだが聞いたことのある曲だ。【ラブソディ・イン・ブルー】

嫌な予感が再び強くなった。

足元を照らすとコンクリートの床がおが屑と埃まみれになっている。しかし、おが屑をどかすと多数の足跡が現れた。

倉庫内の用具箱から箒を持ってこさせ、床を掃いてみる。案の定揚戸が隠されていた。

「思うんですが…」

部下の一人が囁いた。だが俺の顔を見ると口をつぐむ。俺は皆を見廻した。誰も反対を唱えないが、愉快そうには見えなかった。

揚戸を持ち上げてゆくと、光が下から溢れ、音楽が突然大きくなった。

こんな話は聞いていない。

俺は狭い階段を降りていった。後から部下が続く。その頃には皆ひそひそ声で「パーティだ」「まずいぞ」とささやき合っていた。

地獄は下にあるというが、だとしたらそこはだいぶ愉快そうだ。

光が溢れ、陽気なスウィングが天井が高く広い室内に響いている。中央に木箱が山と積まれ、壁がわりに仕切っていた。蓋が開いているのを覗くと酒瓶がぎっしり詰まっている。ウィスキーもワインもジンもある。なんでもありだ。

木箱の壁を抜けると、そこは別世界だった。

タキシードやドレスが乱舞し、黒人の楽団が派手な音をがなり立てている。一流のレストランと変わらない内装が施され、板敷きの床は鏡のように磨き上げられていた。壁はレンガだが、わざと粗野な面を見せ、鮮やかな対比を彩っている。にわか仕立てにしてはよく出来ている。

連中は言うまでもなく金持ちだった。地位と財産を盾に、退屈を持って余して危ない橋を渡りたがっているような。…しかし、今夜の客はいささか趣きを異ことにしている。あの太った男は検事局長。あいつは銀行の頭取。銀髪の老人は大手マーケットの会長。有名新聞社のオーナーまでいる。

ジャックポット
大当たりだ。

そいつらは俺たちに気づくまで暫く掛かった。

「…おい、このニガーはなんだ」

デブ公が顔をしかめる。こいつは労働組合の大物だ。犬猿の仲同士が、仲良く酔っ払っている。大したもんだ。

「今すぐつまみ出せ」

言われて、縞々のスーツを着た長身の男が歩いてくる。剃刀みたいに愛想のない顔だ。

「てめえ、どこから湧いて…」

部下の一人がショットガンを天井へ1発ぶっ放した。皆がゼンマイの切れた人形のように停まる。

俺は低いがよく透^{とお}る声で言った。

「捜査局だ。誰も動くな」

両脇にギャングの手下がいたが、銃口を向けられると、尻の後ろに隠した銃を取るのをやめた。ショットガンに至近距離から狙われて勝負したがる奴はいない。

「合衆国憲法修正第18条のもとに違法行為を摘発しに来た。諸君には署まで御同行願おう」

一斉に抗議の声が上がった。「何様のつもりだ」とか「アフリカへ帰れ」とか聞き飽きた悪態を浴びせられる。連中は俺一人を標的にしていた。踏み込まれてビビっている者は一人もいない。ギャングどもは物見遊山でニヤニヤ笑っている。

「お前！ どういう事か分かっているのか」

恰幅の良いツイードのジャケットを着た男が怒鳴り込んできた。顔を茹でたロブスターのように真っ赤にしている。

「貴様、わしに恥を搔かせるつもりか」

「私は捜査に来ただけです。例え貴方がシカゴ市長でも、任意同行して貰います」

「ほざけ！ …おい、弁護士を呼べ。すぐにだ！」

市長は俺に向き直ると、

「…覚悟しろよ」

とブルドッグのように唸った。「これ」を見られただけよしとするか。

まったく、ジャックポットだ。

「面倒な事をしてくれたもんだ」

シカゴ支局長が椅子を思い切り傾けて言った。洗面の上手い奴がいるとしたら、おそらくこの男に叶うまい。

「お前が黒人だという事だけでも問題なのに、連中を怒らせちまった。…まあ聞け」

俺が何か言う前に支局長が制す。

「お偉いさんがたの言い分によればだ、あそこで開いていた『ティーパーティ』の『お茶』は全部ボルステッド法案が成立する前に所持していたもので、0.5%以下に薄めた物だそう。世間体を慮おもんばかって地下でパーティを開催したが、やましい事は一つもないとかぬかしている」

「ギャングの大物も居ましたが」

「奴らは製造も販売もしていないそう。皆仲良しのお友達ってことだ。聞くが、あの倉庫にあった酒が違法に取引された証拠はあるのか」

「私はあの倉庫に大量の酒類が備蓄されているとの情報を得て踏み込んだんです」

「確かにあったな」

「で？」

「分かるだろう、ティップス。連中を挙げることは出来ん。一部を崩して起訴するなら可能性はあった。…だが、シカゴの有力者をほとんど全部敵に廻せば勝率は1割もないんだ。それくらいはお前にも分かるだろう。第一、うちは脱税は取り締まるが、ガサ入れは警察の仕事になる。管轄外の事へ首を突っ込んだと分かったら司法長官が激怒するぞ」

「犯罪を見逃すっていうんですか」

「だから犯罪じゃない。犯罪には出来ない。向こうは検事局も押さえてる」

俺はデスクに両手をつき身を乗り出した。

「俺はイリノイ生まれで、シカゴも好きです。この州には肌が黒くてもチャンスがある。だから働ける。部下も危険を冒しているのに、目の前で堂々と違法行為をやられて…」

支局長がバン！とデスクを叩く。それからゆっくりと深呼吸した。

「…聞ってるか。フーヴァーが就任するそうだ」

「ええ。そうみたいですね」

「奴は有色人種が嫌いだ。共産主義者と同じくらい。俺はお前の能力を見込んで捜査官へ引き上げた。これからは肌の色なんか関係ない。アメリカって国はグツグツ煮立った大釜だ。人種でも宗教でも政治でもトラブルは無数にある。だから掛け値なしに有能な人材がいる。…しかし、奴にそういう理屈は通用しない。今回の件を知ったらタダじゃ済まんぞ。俺もお前も」

「分かってませんね」

俺は囁くように言った。

「こいつは禁酒法がどうかという問題じゃない。正直に言わせてもらえば、あんなクソツタレの法律なんか消えればいいと思ってる。ですが、そのせいでギャングどもの懐が必要以上に肥えちまった。以前は徒党を組むだけのチンピラ集団が、金を握って組織化してるんですよ。一旦デカくなったら潰しは効かない。際限なく助長してシカゴを脅かすでしょう。今止めないと、この街は無法地帯になっちゃう」

支局長は盛大なため息を吐いた。

「お前の選択肢は2つある」

頭の後ろで手を組み、

「一つは、捜査局を辞めて私立探偵にでもなることだ。サンフランシスコでもニューヨークでも、恨みを持った奴らの居ない所で商売をする。二つ目は、せいぜい寝首を搔かれないよう日陰の部署へ移ってこっそり仕事をする」

「なんとも魅力的ですね」

「お前は嵌められたんだよ」

「分かっています」

「普通は一つ目を薦めるところだが…お前は二つ目を選んでくれ」

「なんですって？」

目の前に投げ出された名刺を見る。

「…『不可能犯罪課』？」

「読んで字の如くだ。未解決の事件を整理整頓し、再調査する。上手くいけば犯人を捕まえられるかもしれない」

続いて投げ出された分厚いファイルを覗くと、過去に迷宮入りになった事件のリストがはみ出すくらい詰まっていた。

「資料室を充てがってやる。良い仕事だぞ。暇は腐るほどある」

「チーフ。馘くびなら馘くびと言ってくれた方がスッキリするんですがね。それとも依願退職にしたいので？」

「お前はこれから一生、出世は出来ない」

独り言のように彼は言った。

「給料も上がらないし、注目を浴びることも二度とあるまい。たまたま犯人を特定できたとしても、それはシカゴ市警か捜査局の別の誰かの手柄だ。お前は一人で調査を続ける」

「それを俺に薦める？ 新手の差別ですか」

「シド。さっきも言ったろう。これからは肌の色に関係なく優秀な捜査官が必要になる。だが、フーヴァーは長く居座るかもしれん。奴が心変わりしない限りお前のような人間が捜査官になることもないだろう。だから希望があるとは言えん」

「だったらなぜ」

「可能性だ。ここに、なんでも知っている男がいる。奴は黒人だが、そんなことは関係ない。未解決事件に詳しく、捜査も一級だ。シカゴだけでなくアメリカのあらゆる犯罪事件に精通している。もし運が良ければ、誰かがお前に気づく。そしてアドバイスを求めるだろう。『彼に聞けば何か分かるかもしれない』…どうだ？

いつの日か、そういう男が捜査局には必要なだと悟る日が来る。必ずな。だから、その礎^{いしづえ}になる覚悟はあるかと聞いている。

断っておくが、これはあくまで可能性の話だ。お前は窓辺の隅で爺さんになるまで無視されたまま寂しく生きることになるかもしれん。だが、俺はそうして欲しいと思っている。

その名刺とファイルを持っていくか、それとも置いてゆくか」

俺は体を揺すった。

「汚い男だ」

指を突きつけてやる。

「はなから選択肢がないくせに説教なんかしやがる。…資料室？」

「部屋の鍵はホリーから貰え。…おっと、そうだった。実はお前に頼みがある」

「なんです」

支局長は引き出しからもう一通手紙を取り出した。

「マサチューセッツに古い知り合いがいてな。彼から依頼を受けた。アーカムという街で大学の図書館長を勤めているが、かなり優秀な男だ」

洗面で告げる。

「…何か裏があるんですね？」

「裏というか…説明しづらいな。とにかく相当な偏屈だ。変人と言ってもいい。だが頭は物凄く冴えている。下手な刑事よりも、な。甘く見るんじゃないぞ。」

「彼が頼み事をするというのは、かなり深刻な事態だ。だから助けてやってほしい。もし本気で不可能犯罪課を立ち上げる気なら、まずアーカムへ言って実感してくれ。辞めるかどうかはその後で決めればいい」

「俺は硬い筆致の宛名書きと支局長を交互に見た。冗談を言っているようには見えない。かと言って真面目とも言えなかった。」

送り主の名は、ヘンリー・アーミテッジとあった。

2・アーカム

支局長の部屋を出て秘書のホリー・マクガイアから資料室の鍵を貰った。

「シド、お手柄だったわね」

皮肉ではなく彼女が言った。

「ああ、大手柄だ。おかげで島流しさ」

「あの人たち、心底怖がっていたわよ、表向きは平気な顔してるけど。たまには調子に乗るなって誰かが教えてやらなきゃ」

「そしてもっと巧妙になるんだな。わざわざ教室を開いてやったようなもんだ」

「あたしは思うけど、あなたには別の大事な仕事を与えられたのよ」

「支局長に？」

「いいえ、神様に」

俺は真面目くさったホリーを見た。彼女は太り気味の中年女性だが、俺の知る限り信心深いタイプには見えない。

そう言うとホリーは首を振った。

「宗教は関係ないのよ。…いえ、やっぱり宗教かしら。とにかくね、そういうタイミングがあるの。後になって振り返ったら、そうだったっていう」

「あんたの言う意味は分からんが、励ましなら受け取っておくよ」

ホリーは温かい笑みを浮かべた。

「投げ出さなければ良い事に出会えるわ」

俺はホリーにウィンクして控え室を出た。

資料室はひどく手狭な小部屋だった。もちろん正式な記録保管庫などではなく、重要とされない事件のネタや、どうでもいい些末な文書を放り込んでおくための物置だ。半地下式のじめじめした所で、地面と同じ高さの細い通気窓がある。窓は埃だらけでろくに光を通さず、そうでなくても陽当たりの悪い場所をさらに暗くしていた。

俺はダンボールの山を蹴飛ばしながら適当にスペースを作り、床を掃いて机を拭いた。

上の自分の元オフィスからタイプライターやインク壺、書類棚などを運ぶ。意外なことに同情してくれる同僚が二、三人居た。他は冷笑するか、関わり合いにならないよう礼儀正しく無視している。厄介な火種を撒いた俺に近づく奴は少ない。

「災難だったな、シド」

アチソンがそばに来て肩を叩いた。

「ヘマだったのさ」

「そう気を落とすな。新しいボスの気が変わるかもしれんぜ」

「だとしても、ここに居座って奴が俺の首をギロチンに掛けるまで待ってる気はないね。チーフはもう十分崖っぷちを歩いてる」

「あんたみたいに鼻の利く奴が居てくれると助かるんだがなあ」

「フーヴァーはお利口だから新しい手段を考え出すんだらうよ」

資料室のデスクにあらかた道具を並べ、味もそっけもない椅子を置いて、真上の白熱電球を点けたら完成。実に簡単だ。ドアのプレートの下に『不可能犯罪課。ただし押し売りお断り』という紙を貼り付ける。…さて、始めるとするか。

俺はジャケットを掛けた椅子を斜めに傾け、デスクに両足を乗せると、支局長から預かった手紙を開いた。155ミリ砲弾の空薬莢を輪切りにした大きな灰皿を引き寄せ、煙草を吸う。紫煙が電球の黄色い光を受けてぼんやり漂った。

『親愛なるテッド』

君が私の名前を見てどれだけ嫌な気分になっているか理解しているつもりだ。しかしながら私としては昔のよしみという古い手段に訴えねばならない。もし君がまだ私に理性が残っていると思うのなら、ぜひ手を貸してくれたまえ。

君の部下を一人派遣して欲しい。地元の警察はあてにならない。優秀で、目鼻の利く人材が要る。それに肝の据わった人物がいい。頭が良くても柔な気持ちの人間なら来ない方がいいだろう。

もちろん、そんな者がいるなら、真っ先に他の事件へ投入したがるのは分かる。迷惑を承知でお願いします。君に返せるものは何もないが、もし私に運があり神のご加護があれば、この地で起こりつつある忌まわしい事件を未然に防げるだろう。それは結果的に連邦政府への忠誠として報われる。

こちらはいつでも歓迎するが、出来れば可能な限り早くしてもらいたい。無理難題を言って済まない。ホームズ君を呼びたいところだが、彼も高齢だからね。

君の友ヘンリー

P.S 埠頭倉庫の件は君も残念だったろう。惜しいところまで行ったな。』

俺がなぜアーミテッジがガサ入れの件を知っているのか考えていると、開けておいたドアの枠をコンコンと叩く音がした。顔を上げるとマッコイのなまっ白い顔があった。

「うまくいったか」

「ああ、ユニオン駅で見送ったよ」

「よし」

俺は彼を引き入れるとドアを閉じ、ニア・ビール（アルコール度0.5%以下の紛い品）を2本開けた。水みたいな代物だが、無いよりはました。

マッコイの頬にほんの僅か赤みが戻ってきた。

「話があるんだ」

目を伏せたまま言う。

「あの倉庫の件だが…」

「あれはもう終わった話だ」

「聞いてくれ。あの晩俺は…」

「マッコイ」

俺はやんわりと言った。

「その話はもうするな。聞かなければ知りようがないし、知ったところで良いことなんかない。そうだろ？」

「あんたは飛ばされたんだぜ」

「どこに？俺はまだ支局にいるぞ。ここが俺のオフィスだ」

「こんな物置に入れられて平気なのか？ブタ箱の方がましだぜ」

「そうでもないさ。どっちにしる新しい親玉は俺の顔を見たとたんケツを蹴って追い出すだろう。そうなる前に退避行動を取ったと思えばいい」

「シド。あんた、人が良過ぎるぜ」

「マッコイ」

彼に煙草を勧め、

「あんたはあの夜忠告してくれたし、タレコミ屋を保護してくれた。良心のない警官なら、あのままギャングの元へ送って殺させ、点を稼いだらう。例えあんたの言う意味を正しく理解していたとしても、俺に選択の余地は無かった。連中を一泡吹かせるか、見て見ぬふりをするかだ。あの場から逃げ出してみろ、皆俺を根性なしと思うだろう。そうなったらまともな捜査なんて出来なくなる。貧乏クジを引いてもタフでいなきゃならない時があるのさ。タフでなくてもな」

「…ああ」

マッコイは頷き、砲弾の灰皿に灰を落とした。

「ああ、そうだな。選択の余地はない」

「あんたには病気持ちの女房もいる。ここで下手に俺たちが不平を漏らせば退職金がバアだ。今回の件は忘れる。奴らも二度とあんな馬鹿な真似をしないだろう」

俺と組めば仲間外れにされかねないのに、彼はいつも相棒を務めてくれる。『小遣い』を組織から受け取っているのはずっと前から気づいていた。だが虎の威を借る狐のような真似をする奴じゃない。俺と違い多少の融通を効かせる態度を取れば捜査がやりやすくなるのを熟知している。連中の都合の悪い話でなければだが。

「『シェーバー』の奴が聞いてきたんだ」

不意にマッコイが言った。

「フィッツロイが？」

剃刀のフィッツロイはオドンネルの右腕で重要な殺しはだいたい奴が担当している。あの夜俺にイチャモンをつけてきた縞々の男だ。

「『最近倉庫に興味を持つ奴がいるそうだな』って。俺は断れなかった」

「お前は大丈夫なのか」

「ああ。その場に居なかったからな。シェーバーが忠告したのさ。妙に義理堅い奴だ」

「オドンネルも暫くは鳴りを潜めるだろうさ。Aプラスとはいかないが、まあ及第点だよ」

俺は立ち上がりジャケットを着た。

「どこへ行く」

「ちょっとマサチューセッツまで」

「マサチューセッツ？」

「チーフの古い友達がお呼びだそうだ。仕事があるってのは良い気分だぜ。たとえ半端な使いでもな」

俺がシカゴ支局の玄関から出ると、縞々のスーツが近寄ってきた。奴は薄笑いを浮かべ、俺のすぐ前に立った。

「よお、黒んぼのタフガイ」

無視して通り過ぎようとする、素早く立ち塞がる。

「どこへ行く」

「野暮用でね」

「あの時は恥を掻かせてくれたな」

「それはこっちの台詞だ」

「黒んぼが白人をコケにして良い気分だろ」

俺はうんざりしてきた。

「何の用だ、フィッツロイ？」

「分かってるはずだぜ」

「いいや、分からんね」

「こっちに手を出すなってんだよ。あんたが道を塞がなきゃ皆幸せでいられるんだ。金も受け取らねえで英雄気取りか？ 今どき流行らねえぜ」

「オドンネルの件なら俺は外された。もうそっちに手は出せない。満足か？」

「馘にされたんじゃないのかい」

「左遷はされた」

「事務屋にでも転向か」

「いいや。不可能犯罪課ってところだ」

「はあ？」

「未解決事件の担当だ。迷宮入りの犯罪を追うんだよ。あんたらのように分かりやすいワルを相手には出来ない」

縞々は腹を抱えて笑った。

「傑作だな、おい！ シャーロック・ホームズかよ」

「実は彼の弟子なんだ」

剃刀男は長い指を突きつけた。

「これで分かったろう。シカゴを牛耳ってるのが誰かってことが。あんたもこっち側についた方が身のためだぜ」

「シェーバー」

「俺をシェーバーなんて言うんじゃない」

目を細くしている。それこそ不意に剃刀でも出しそうな雰囲気だ。

「お前には一つだけ良いところがある」

「なんだと」

俺は穏やかに言った。

「お前は昔気質の悪党だ。若いくせにな。お前は女子供に手を挙げたりしない。殺すのはヤクザで市民には手を出さない。たとえ脅す時でもな。お前なりのルールがあって、そいつを貫いている。だからウィスコンシンで起きたマフィア殺しは見逃してやる。ノックスの事件も」

「何の話だか分からねえ」

彼の声はもう嘲りを含んでいなかった。

「俺を脅す暇があるなら、今のうちに足を洗う算段をするんだな。オドンネルはいずれ潰される。もっと新手の組織が現れて、今よりも残酷で派手な火花が上がる。お前なんかより遥かに汚い手を使う穀潰しどもがうようよするぞ。」

俺はそれを止めようとしたが、お前らみたいな阿呆が邪魔をした。後はどうなっても知らん。勝手に殺し合っている」

「黒んぼが生意気な口を利きやがる」

不意に剃刀が笑った。

「まあいい。恨みが無いってんなら、こっちも水に流すさ。冷や飯を喰ったのはあんただしな」

「一つ、釘を刺させてもらう。あんたたちを裏切った男の事は忘れる。彼を利用したろう？ もしそいつが殺されたら、今度こそ容赦しないぞ。俺に汚い手が使えないと思うな」

フィッツロイはニヤニヤ笑いながら100ドル札を2枚俺のポケットへ押し込んだ。

「これはなんだ」

「取っとけ。これでチャラだ」

「俺を引き入れたつもりなら誤解している。お前らの言うことは聞かん」

「ただの贈り物だよ。餞別の印だ。だろ？ …まあ確かにあいつを餌にしたよ。もしあの間抜け野郎がシカゴにノコノコ現れなけりゃ、俺たちに何が出来る？ 奴がどこでくたばろうが知ったこっちゃない」

「忠告はしたからな」

「アディオス、アミーゴ」

剃刀はまだ笑いながら背を向けて歩み去った。

俺は自前の車でマサチューセッツまでの長い旅に出た。ありふれた2座席のフォードA型ロードスターは俺の唯一の財産と言っていい。こいつの長所はシンプルで頑丈なところだ。馬力もそれなりにあるし座り心地もいい。決して豊かとは言えない俺の某給でも買える車だった。

出発前に、まずあの夜参加した部下たちへ連絡を入れた。幸い面倒な事にはならなかったらしい。「残念です、ボス」と彼らは言うてくれた。俺は今度の件で腐らないように言うておいた。実際、彼らのような連中が居なくなれば、シカゴには汚職警官しか居なくなる。

それとあと一つ、片付けておかねばならない事があった。

スプリングフィールドはシカゴに比べればずっと小さく落ち着いた街並みだった。シカゴ暮らしに慣れてしまうと、この鄙びた田舎町が州都というのは意外な気がする。しかし暗殺されたリンカーンはここで政治家として出発したし、俺たち黒人にとって他に比べれば住み心地は悪くない。欠点を挙げるとするなら、俺のような人間には死ぬほど退屈な街だということだ。

街外れの黒人住区に行く。ゆっくりとロードスターを進ませ、昔ながらの木造家屋が立ち並ぶのを眺めていると、気づかないうちに溜めていた緊張感がゆるみ、肩の力が抜けた。顔見知りか声を掛けてくれる。俺は手を振った。

「よお、シド。稼いでるか」

「まあまあさ」

「悪党を蹴っ飛ばしてくれよ」

「仰せのままに」

俺の生家は二階建ての小さな家だった。綺麗に整地された芝生に花壇が色を添える。お袋は花好きで特にチューリップのような鮮やかなのを好んでいた。

玄関を抜けてただいまを言うと、キッチンでクッキーを焼いていたお袋が振り返り、一目見るなり、

「今度は何をやらかしたんだい、シド？」

お袋に嘘はつけない。時々なんで精神科医にならなかつたんだろうと思うほど勤が良いのだ。

「ちょっと面倒な事になってね。…いるかい？」

「だいぶ神経質になってるよ。慰めておやり」

俺は階段を昇り、奥の寝室へ行った。

開いているドアから中を覗くと、拳銃が俺を睨んでいた。

銃を握る手が震えている。タレコミ屋の男はベッドの端に座り込み、腰の辺りで狙いをつけていた。ベッドには15、6の娘が寝ていて、ぼんやり宙を眺めている。脇のサイドテーブルのそばで疲れ切った顔の女房が俯いていた。

俺はドア枠にもたれ、煙草を取り出した。

「32口径じゃ人は殺せんぞ。そんな小さな銃じゃな。せめて38口径にしろ」

もちろん嘘だった。これよりずっと小さな22口径でも人は殺せる。そうでなければ誰も護身用に小型の拳銃を持ち歩いたりはしない。素人が、人間がわずか数グラムの弾

でいかに簡単に死ぬのかを知ったら、驚きを隠せないだろう。ただ22口径よりは45口径の方が死ぬ確率はずっと上がる。それだけのことだ。

煙を吐いてゆっくりと、噛んで含めるように言う。

「あの件は片が付いた。あんたを追ってくる奴はいない」

「連中は逮捕されたのかい」

俺はかぶりを振った。タレコミ屋はガックリとうなだれた。

「どうせそうなると思ってたんだ…やるだけ無駄だった」

「そうでもないさ」

部屋に入ると椅子を引き寄せ、向かい合わせに座る。

「少なくとも連中の肝を冷やしたのは間違いない。あいつら、寸前まで気づいてなかった。あらかじめ分かっていたら酒なんか一本も無かったろうよ」

「あんたを裏切ったな」

「裏切っちゃいないさ」

「でも上手くいかなかった」

「なんて言われたんだ、あの晩」

「いつもはただの隠し倉庫だったのに、パーティを開くなんて言い出した。あまりに急だったんで、あんたに連絡する暇もなかった。奴らの目が離れなかったこともある」

「そんなことだろと思ったよ」

タレコミ屋は床をジッと見つめ呟いた。

「俺に殺しは出来ねえ…度胸も腕もない。だからせめてブタ箱へ一遍入れてやりたかった。弁護士の野郎がすぐに出すとしても」

「あんな連中ほっとけ。あんたの娘に手を出した奴は、いずれ喉を掻っ切られるか、銃で撃たれるかしてドブ溝で発見されるんだ。あんたが手を汚すことはない」

タレコミ屋がポツリと言った。

「くたばりやがれ」

俺は思わず微笑んだ。

「…なんで笑う？」

「初めてあんたの声を聞いたよ」

痩せた男は弱々しく笑った。昼間の光で見ると、こんなに小さかったのかと思うほど貧相な体つきだった。だが、彼がシカゴ中の有力者やギャングどもを一泡吹かせたのだ。酒を失いたくないために連中は慌てて大芝居を打ち、俺を失墜させることで辛うじて面目を保った。おかげで今は家族ともども命を狙われる身だ。タフでなければ出来ることじゃない。

「さあ、もういいだろう」

俺が手を差し出すと、男は初めて気がついたように手の中の銃を見、それを俺に渡した。俺はサイドテーブルに銃を置いた。

立ち上がり、ベッドの端に腰掛ける。だが必要以上に娘には近づかなかった。

彼女は惚けたように宙を見たままだった。

何を言っているのか分からない。

この娘はこれから一生、男を不信の眼で見るだろう。どんなに愛し合っても、ある日ふと思うのだ。この男がレイプする確率はいくらだろうと。人間が性を暴力の道具に使えば、いかに容易に傷を付けられるか、嫌というほど見てきた。自尊心を根底から揺るがされれば、誰だって頭を上げて歩いていられなくなる。たとえ大の男でも。ましてや若い女性ならなおさらだ。

忘れ掛けていた怒りがジワジワと込み上げてきた。…『くたばりやがれ』。まったくだ。奴らは100回絞首台へ昇るべきだ。

その時、不意に、彼女が俺の手を握った。

脇で腰掛けていた女房がハッと息を吸った。

柔らかな手だった。掌の中に雛が迷い込んだような。

娘は聞き取れないほど小さな声で「ありがとう」と呟いた。そして手を離した。

「…一言も喋らなかつたんです」

女房が囁いた。

「あの日以来、口を貝のように閉じて。お医者さんに見せてもダメでした」

「奥さん」

俺は彼女へ向き直った。

「ここに暫く居れば良くなりますよ。俺のお袋はあれで面倒見が良くてね」

「シド、ボブが来たよ」

床を軋ませながらお袋がやって来た。俺はベッドから立ち上がり、彼女に近づいて小声で言った。

「かなり参ってる。世話をしてやってくれ」

「あんた、あたしを節穴だと思ってるのかい？」

お袋は愛嬌たっぷりの^{グリズリー}灰色熊のようにベッドへ歩み寄り、

「さあさあお嬢ちゃん、クッキーが焼けたよ。オバちゃんと一緒に食べようねえ」

実際、200ポンドもある彼女は巨体に比して懐もデカかった。

俺は男を促し、二人で部屋を出た。

ボブ・マーシーは一見すると浮浪者か麻薬の売人にしか見えない。長い髪を数珠にして垂れ下げ、生え際を剃っている。サングラスをいつも掛け、長身の痩せた体を揺すっていた。だが、知れば知るほど、この男がどんなに良い人間か分かる。

「よおよお、捜査官が二人お目見えかい」

ボブは気さくに握手を交わした。

「冷や飯を喰わされたって聞いたけど？」

「ああ、しこたまな」

「シド」

ボブが真顔で言った。

「こっちへ戻ってこいよ。あんたみたいに優秀な人間がクソどもの機嫌を取るこたねえ。仕事ならいくらでも紹介してやる。俺にはサツにツテだってあるんだぜ。もち、賄賂なんか取らねえクリーンな仕事さ」

「ありがたいが、今はシカゴで仕事をしたい」

彼は肩をすくめ、両腕を開いた。

「いいとも。お前の好きにやんなよ。こっちはいつでも歓迎するからさ」

「それよりこの男の面倒を見てやって欲しい。たぶんトラブルは無いと思うが、念には念を入れたい」

「だな。トンネルを使おう」

「『トンネル』？」

男が聞いた。

「ムッシュ、『トンネル』ってのは南北戦争前からある逃げ道のこった。奴隷を北部へ逃すためのな。俺たちの友人が秘密のルートを持っていて、それが今でも機能している。何か不味い事があった時の用心さ。文字通り地下道を^{くぐ}潜ることもあるぜ」

「ムッシュってなんだ」

「『旦那』って意味さ。ミスターとおんなじ。俺の口癖でね」

「あんたはこれからボブについてトンネルを潜ることになる」

俺は言った。

「娘さんの容態が落ち着き次第、彼の案内で遠くへ逃げる。彼なら確実に安全な場所まで送ってれる」

「ニューヨークでもカリフォルニアでも好きな所へ届けてやるぜ。なんならメキシコがいかい？」

「任せておけば安心だ。…けど、いか、今からあんたたちは『死人』になる。絶対にシカゴの家族や知人と連絡を取るな。あんたの奥さんもだ。オドンネルの奴は興味を失くしたようなことを言っているが、風向き次第でどうなるか分かったもんじゃない。あんたたちの行先を風の噂で聞きつければ、ちょっと『挨拶』をしようって気になるかもしれん。電話は交換手が賄賂を貰っているし、郵便配達員も信用できない。知り合いの知り合いに声を掛けて様子を見てもらうのもダメだ。どんな些細な糸口でも連中は必ず見つけ出す。そうになったら娘さんも危ない。だから、辛いだろうが、みんなには死んだと思ってもらうんだ。ボブに助けてもらって新しい人生を始める」

俺はポケットから200ドルを出し、ボブに渡した。

「これで足りるか」

「ああ、十分だ」

ボブは札を確かめ、男のシャツのポケットにそのまま押し込んだ。

「こんな大金どうしたんだい」

「オドンネルの部下がくれたんだ。餞別だとさ。俺が左遷されて踊ってやがる」

「へ、お前さん、ずいぶん安く見られたな。1000ドルでも足りねえってのに」

「いつも面倒を掛けるな」

「よせよ」

俺の腕を軽く叩く。

「俺あ根っからの風来坊だが、お袋さんにはえらい世話になってる。こんな使いつ走り、いつでもやるぜ」

「ありがとうよ、兄弟」

ボブを見送って居間へ行くと、お袋と娘と女房がテーブルを囲んで話をしていた。娘はごく普通に世間話をしている。女房も気安く相槌を打っていた。

俺たちは呆気に取られて眺めていた。

「なんて顔してるんだい」

お袋が気づいて声を掛ける。

「…どんな魔法を使ったんだ？」

「オズに聞いてみな」

案件をあらかじめ片付けると、今度こそ清々して車を出した。

俺は間違っていなかった。

ヘマをしたが、十分報われた。

あらためてアーカムまでの旅に出る。シカゴからボストンまでは1000マイル以上の距離だ。アーカムはさらにその先にある。

最初、俺はアーカムがどこにあるのか分からなかった。一般向けの地図帳にはそんな地名などどこにも載っていない。

公共図書館蔵の大地図帳を閲覧してやっと確認できた。アーカムはボストンより北東の沿岸沿いにある小都市らしい。セーラムとイプスウィッチの間、海岸よりやや内陸の、チャールズ川の支流にある。ボストンが面するマサチューセッツ湾と北のイプスウィッチ湾に挟まれた半島の根本だ。他にもダニッチとかインスマスという変わった地名があった。

俺は周辺地域を含む5万分の1の地図を入手し、捜査の足掛かりとした。もっとも捜査になるかどうか話を聞いてみないことには分からないが。

少しだけ気がかりなことがあった。

俺が Arklam という地名を初めて見つけた時、頭の奥で何かがチリッと走ったのだ。頭痛というより静電気のような軽い痛みだった。ごく些細な事なので何でもないと言えど何でもないが、後々この事を思い出すようになる。

鉄道も考えたが、愛車を駆ってはるばる行くことにした。このところろくに休暇を取っていなかったし、ちょっとした旅行気分だ。左手に五大湖を眺めつつのんびり走る。クリーブランドからバッファローを経由し、ゆるやかに蛇行しつつ東へ向かう。途中モーテルで2泊した。

ちょっとしたハプニング（例えば「空室あり」なのに満室ですと断られるとか）はあったが、5月の春頃ということもあり、おおむね旅は快適だった。ロードスターの幌を降ろし、柔らかな風に煽られながらお気に入りのジャズナンバーを口ずさむ。そういえば最近シカゴのキング・オリヴァー楽団に黒人のトランペッターが入ったそうだ。名前はルイ・アームストロングとかいった。

宿泊したモーテルはどれも掘立て小屋より少しましといった風情だった。キャンプ場のような空き地にバンガロー風のログハウスが立ち並んでいる。借りた小屋はひどく狭い居間と寝室があるだけだ。風呂は外に共同のシャワーがあり、トイレも同様だった。最近^{はや}は自動車^はで旅するのが流行っている^のので、そのうちもっと立派な建物が出来るだろう。食事は自分で持ち込むか、近くのレストランという名の出店で摂るしかない。それでも車内で寝るよりは遥かに良い。

湿気を微かに含んだベッドに寝そべり、持ってきた未解決事件のファイルをざっと流し読みする。サイドテーブルの上に重石のようなラジオが鎮座していた。聞こえてくるのはモーツァルトの^{レクイエム}鎮魂歌だ。陰鬱な旋律と悲鳴のような合唱がなんとなく仕事内容にふさわしい。おかげで励まされる。代わりにラグタイムでもやってくれないだろうか。

書類の中身は玉石混交とっていい。ニューオーリンズの斧男、アンブローズ・ビアスの失踪、俳優のウィリアム・デズモンド・テイラー殺害事件といった有名どころから、明らかに初期捜査の段階で司法側がミスを犯して追求が出来なくなったケース（よくあるパターンは警官が現場を無責任に荒らして証拠を台無しにしてしまうといったこと）など。

^{おびただ}夥しい数の失踪届はとりあえず除外し、再調査の必要がありそうな事件簿にチェックを入れておく。シカゴへ戻ったらじっくり調べなくては。

考えてみれば弁護士の卵からBOIへ入局してこのかた、現場で必死になって働いたが、犯罪史や捜査に役立ちそうな科学技術をじっくり学ぶ機会がなかった。シャーロック・ホームズもよく過去の事件を引き合いに出していたが、類似の事件からヒントを見つけるのはあり得ることだ。

…それはまあよしとして、その他の案件はどうにかならないものか。

『1920年、イリノイ州スコット空軍基地上空で輝く3個の飛行物体が南西から北東へ通過して行った。目撃者の証言によると少なくとも時速500キロ以上だったという。これは現行のいかなる航空機よりも高速である。』

『1915年、月面上に正体不明の発光点が確認される。天文学者にも説明がつかない。』

『1921年、アラバマ州で夜中^{やちゅう}銀色のスーツを着た小人に遭遇したとの報告あり。その人物は武装していなかったが、目撃者の少年が近づこうとすると激しい頭痛に見舞われ、3日間寝込んだという。』

『1919年、メイン州アパラチア山系において猟師が全身獣毛に覆われた大男を目撃。発砲するも命中せず。なおこの地域では昔からインディアンが<がぐ>と呼び恐れている巨人が棲息すると噂されている。』…

これらが捜査官の仕事に値するか大いに疑問だが、少なくとも誰かが合衆国の治安を乱す可能性があると考えて含めたに違いない。いずれにしろ、こちらの力の及ぶ範囲でなければ捜査は無理だ。

アーミテッジは俺に、いや捜査局に何を求めているのだろう。

通常の犯罪なら地元の警察を頼ればいい。ひょっとして州外へ違法に取引されているものだろうか。酒などの密輸品ならこちらの管轄だ。

だが、支局長の態度からすると、どうも普通のケースではない気がする。

大学の図書館長といえばちょっとしたインテリだ。ならば大学関連だろうか。内密に事を収めたい事件とか。なんとも漠然としている。

俺は考えるのをやめ、ベッドへ横になった。ぼんやり天井を眺めていると眠気とともに歪んでゆく気がする。その夜何を見たのか覚えていないが、朝になるとシャツが汗でびっしょり濡れていた。

(縁起でもない)

気持ち悪くなったシャツを脱いで着替える。嫌な事が起こらなければいいが。

あいにく、そうはいかなかった。

スローペースで進んだとはいえ、1000マイルを走破するのは少々骨が折れた。まだ舗装のない剥き出しの土の道が多く、道路標識も良い加減な物が立っている。人に聞いた方がずっと早い。

延々と地平線まで続く道の脇に、これまた延々と電信柱が並んでいる。どこまで行っても変わらない眺めにだんだん同じ所をループしているのではないかと思ったことも再三だった。

さすがにくたびれてボストンではまともなホテルに泊まった。幸い宿泊を拒否されることもなく（冷たい目では見られたが）、専用のバスルーム付きの部屋で眠れた。南部ならこうはいかない。

ボストンからアーカムへは20マイルほど北東へ行った所にある。途中セーラムを通過した。潮気を含んだ風が鼻腔をくすぐる。ここが魔女裁判で有名な所か。見た目は平凡な港町だが。

そこを抜けてビバリーを通過した辺りから緑が増えてきた。木立が道の両脇に連なり、合間に畑と草地が見える。新緑の若々しい色が歓迎してくれた。

点在する家は昔ながらの植民地様式だ。横に細長い白い板敷きの壁に、格子状の窓、三角の破風を上に冠した玄関。古き良きアメリカというやつだろう。ここいらはアメリカが始まった初期の植民地の風情を色濃く残している。矢継ぎ早に変わってゆく大都市シカゴに比べれば、時間が止まっているような場所だった。

そしてこの森のトンネルを潜った先に、アーカム市がある。

アーカムという街を一言で表すのは難しい。

見た目は鄙^{ひな}びた小さな地方都市で、この周辺と同じく古い様式の建物が並ぶ、こじんまりとした街だ。人口で言うならせいぜい3万人程度だろうか。シカゴはもちろんボストンとは比べるべくもない。

周りは低いなだらかな起伏に森や畑や牧草地が広がり、互いに離れた村が点在している。その中へ埋もれるようにアーカムはある。

車を低速で通りを流すと、タイムマシンに乗っている気がする。ほとんどが2階建ての古い家屋だ。高層ビルなどむろん無いし、3、4階建ても少ない。遮るものがないので空が広く感じられる。

とはいえすべてが古びているわけではなく、中心街にはシカゴなら場末の映画館が2、3軒あり、小さいながら劇場もある。7階建てのビルがこの街のランドマークになっていた。

市街地はミスカトニック川という河口付近の幅広の川を挟んで南北に分かれている。北は鉄道が通じており、小さな工場やオフィスビルが目立つ。南は川に面した波止場や倉庫があり、繁華街があった。繁華街といっても車の数は少なく、人通りもまばらだ。

こう書くといかにもものんびりした田舎町のようなのだが、異様なのは大きな大学があることだった。立派な棟が建ち並び、かなり古くからあると思われる石造りの校舎も混ざっている。この街の規模にしては広さが尋常ではない。ほとんど中心部を占有していた。

それと、全体的に清潔で明るい雰囲気の家屋が多いが、時折ひどく古びて荒れ果てた家が挟まっている。中には一区画まるごと荒廃した軒並みがあった。それがまたチグハグな印象を与える。空き地に捨てられた自動車やゴミがあるのは珍しくないが、捻れた形の石碑らしきものが立っているのも変な感じだ。

そしてなによりこの街を包む空気が妙だった。

ごく普通の外見をしているが、どこことなく^{けだる}気怠さとは違う不穏なものが微かに漂い、落ち着かなくさせる。これといって具体的に指摘できるものはないが、誰かに見られているような（偏見のある人間から睨まれるというのではなく）気配が絶えず、こちらの神経を逆撫でするのだ。最初に小高い丘からアーカムを眺めた時、その美しい街並みに感嘆すると同時に、わずかだが気持ち^{けだる}が沈むような萎えるような奇妙な憂鬱感が俺を襲った。

手紙の住所は『ミスカトニック大学/大学図書館』とある。俺は大学の駐車場にロードスターを止め、図書館へ向かった。

3・アーミテッジ教授

灰色の御影石で作られた重厚な3階建ての建築物が俺を出迎えた。ゴシック風というのか、上が半円のアーチで縁取られた窓の間に、浮き彫りになった擬似の柱が立っている。古代ギリシアのような何本か細い溝の入った柱だ。玄関ポーチは4本の柱で支えられていた。

それ以外に目立つ所といえば、図書館の前に繋がれている1匹の犬だった。

艶のある黒毛に覆われた大型のマスチフで、がっしりした顎としなやかな毛並みの下に逞しい筋肉を隠している。走る事と狩る事に特化した肉体だ。彼がその気になればヘビー級のプロボクサーでさえひとたまりもないだろう。太い鎖が首輪に結ばれているとはいえ、あまり安心できる眺めではない。

マスチフは吠えるでもなく尻尾を振るでもなく、座ったままこちらを見ている。まるで彼こそが図書館の^{あるじ}主のように。そして興味を失くしたように寝伏せた。

中へ入ると吹き抜けのホールで、磨き上げられた大理石の床に靴音が甲高く響く。両脇に階段と著名人の胸像^{トルソー}が並んでいる。プラトンやピタゴラスが俺を^{いかめ}厳しく睨んでいた。

そのまま進むとガラス張りのドアを開き、正面のフロントで受付嬢に聞く。丸眼鏡を掛けた三つ編みの女学生らしい。頬にそばかすが浮いている。彼女が読みかけの雑誌を置くと、なんとそれは『ウィアード・テールズ』（*1920年代の代表的なパルプ雑誌）だった。表紙では扇情的な金髪の美女が大猿に襲われている。

「学生がそんな物にうつつを抜かしているのかい？」

「あら、四六時中アウグスティヌスの『告白』を読めとおっしゃる？」

打てば響く受付嬢。

「そうだな、息抜きも必要だろうな」

俺は頷いた。

「図書館長は居るかな」

すると彼女は妙な目つきで俺を見た。

「…学者タイプには見えないわね」

「一応学生だった時もあるんだが」

なぜそんな目で見られなければならないのか分からず、俺は当惑した。

「アーミテッジ教授に呼ばれてシカゴから来たんだ。面会したい」

「3階にオフィスがあるわよ。…ねえ、誰なの貴方？」

「実は『不可能犯罪課』の捜査官でね」

「まあ、素晴らしい！ きっと教授ならそんな人を呼ぶと思ったのよ」

素直に感嘆され、ますます当惑の度が強くなる。

受付嬢に場所を教えてもらい階段を上る。エレベーターもあるが、この図書館に興味があった。ざっと歩き回ってみる。

建物は凹型になっていて、中央はカウンターや分類された書籍カードの書棚、新聞・雑誌類が置かれていた。左右の棟に書架があり、間に閲覧席が設けてある。熱心な学者や学生たちが静かに、あるいはひそひそ声で机に向かっていた。図書館特有の静寂が心地良い。空気には書物のカビ臭さが微かに漂う。蔵書はシカゴの大図書館ほどではないにしろ、かなり充実しているようだった。特に地方史の資料が山とある。地方ならではの強味だ。

この中を歩いていると異世界へ迷い込んだような気がする。俺の日常は喧騒と悪臭と熱気が支配していた。しかしここには沈黙の神がいる。

新聞コーナーがあったので立ち寄ってみる。吊り下げ式の書架に数十余りの新聞が置かれていた。地元紙の『アーカム・アドバイザー』と『アーカム・ジャーナル』、その他に『ニューヨーク・タイムズ』や『ボストン・グローブ』、イギリスの『デイリー・ミラー』、『ガーディアン』、フランスの『フィガロ』、ロシアやイタリア、日本の英訳新聞まである。

脇に古い新聞の書棚があったので、『アーカム・アドバイザー』を漁った。そのうちの1924年5月3日の新聞の3面記事にく北地区に変死体を発見。死体遺棄の疑いで警察が捜査中>とあり、通りの名が記してあった。

3階の左棟がアーミテッジ教授の^{オフィス}執務室だ。ドアをくぐると待合室で中年の女性の秘書がいる。背筋にピアノ線でも入れたように真っ直ぐな姿勢でタイプを打っていた。俺に気づくとゼンマイ仕掛けの人形のようにギョロリと睨みつける。

「何か」

「シカゴ捜査局のシドニー・ティップスです。アーミテッジ教授に呼ばれたのですが」

とバッジを見せる。秘書は内線電話の受話器を取り上げた。

「教授？ お見えになりたいという方が。シカゴから来たそうです。はい。…お会いになるそうよ」

「どうも」

秘書はタイプを打つ手を止め、俺が中へ入るまでジッと見ていた。その首がまた機械仕掛けのように正確に回転する。まるで鳩振り時計だ。

部屋の中は予想通りだった。腰羽目に囲まれた^{いかめ}厳しい室内だ。壁という壁が天井まで本棚になっていて、それ用の梯子も備え付けてある。本の大部分は背表紙に何本かの骨

が入って補強されるような古めかしい物だった。四隅に蘇鉄やパームツリーの鉢が置いてある。窓辺の上には歴代の図書館長の肖像が飾られていた。デスクは黒檀の重々しい造りで、変わったところといえば革張りの椅子の代わりに座り心地の良さそうな藤椅子になっている点だろうか。機能的なオフィスに比べたら、ここは世紀末の時代へ戻った感がある。

藤椅子に鎮座していたのは禿頭の男だった。見たところ50代で、年齢の割に老けて見える。頭頂部がきれいに禿げ上がり、金縁の眼鏡を掛け、豊かな口髭と顎髭で飾られている。目の辺りが深く落ち窪み、鼻はそれほど高くないが、彫りの深い印象を受ける。そのわりに頬骨は丸く、頬が膨らんでいるので、厳格さをいくらか和らげていた。

ヘンリー・アーミテッジ教授はガチョウのペンでしきりにメモを取っていたが、俺が近づくと作業をやめてペン挿しへ戻し、藤椅子にもたれてこちらを眺めた。太ってはいるがさほど偉丈夫というわけでもなく、手は骨張ってシミが浮いている。それなのに眼窩の奥からこちらを伺う眼差しは、こっちがいささかたじろぐほど鋭かった。

俺は名乗ったが、返事はない。

「――なるほど、」

しばらく無言の後、教授は豊かなバリトンでしゃべった。

「それでは君がヘマをした男なんだな」

「なんですって？」

「埠頭倉庫の捜査に失敗したんだろう」

「ええ、確かにそうですが、どうして…」

アーミテッジは手を振って俺の言葉を止め、

「シカゴからはるばる来てもらったが、さて…」

値踏みするようにジロジロと眺める。

そして唐突に言った。

「君は優秀かね？」

「もちろんです」

「どうしてそう言える」

「捜査局のエージェントは馬鹿じゃ成れません」

「しかし、中にはそれに近い人種もいるんだろう」

「まあね」

俺は苦笑した。共和党を悪く言うわけじゃないが、近頃の捜査局には長官の太鼓持ちと見紛う奴も混ざっていた。汚職に手を染める者や権威を傘に着る輩も少なくない。

「だが俺は連中とは違う。点稼ぎに仕事をやるような事はしません」

「うむ」

教授は大理石の煙草入れから1本取り出し、それでトントンと机を軽く叩いた。

「それではまず、君の履歴を聞こう」

「待って下さい。これは試験か何かですか。俺は学生じゃない」

「君に頼むかどうかは、中身を確認してからだ」

俺は腹が立ってきた。ここへ来たのは入試を受けるためじゃない。そして間違っただけの質問をした。

「俺が黒人だからというなら…」

「———なんだって？」

再び鋭さが戻ってきた。

「…肌の色で能力を測る者もいますが」

アーミテッジは顔をしかめ、

「君が白人だろうと黒人だろうとインディアンだろうと日本人だろうと、この際どうでもいい事だ」

「なんですって」

同じ台詞を二度も言うとは、俺も間抜けだ。

「私が知りたいのは君個人の能力であって、人種などという瑣末な問題にかかずらわっている暇はないのだ。…さあ、では、君は捜査官としてどう優秀なのか説明してくれたまえ、経歴を語ることで。生まれはシカゴかね」

「スプリングフィールドです」

「小学校はもちろん卒業したな？」

「シカゴ大学の^{ロウスクール}法務学院を修了し学位を取りました」

「弁護士にでもなるつもりか」

「そのつもりでした」

「なぜならなかった」

「戦争が終結して…」

「待ちなさい」

手を挙げる。

「———欧州へ行ったのか？」

「陸軍へ志願しました。出征先はマルヌです」

「戦闘には参加したのかね」

「そのために行ったんです」

「それでは銃弾や砲弾の雨に遭ったんだらうな」

「ええ、まあ」

「『ええまあ』とはどういうことだ」

「あまり思い出したくないもので」

爆発、混乱、狂乱、死体、泥、倦怠、そして血。

「君は戦争の英雄なんだろう」

「昔はそうなのかもしれませんが、あの戦争はそんなものじゃありませんね」

「というと？」

「俺の見る限り英雄なんて一人もいやしない。ただ根性があるかどうかで。だが根性で弾は防げない」

「なかなか^{うが}穿ったことを言うな」

「ようするに前へ進むしかないってことです。さもなきゃ背中から撃たれるしかない。状況を見ながら生き残る可能性をほんの少しでも得たかったら、シヨンベンをちびりながらでも前進する方がましってことなんです。…失礼」

「さぞかしむごい目に遭わされたんだろうな」

「生きるか死ぬかですからね。仕方がありません。ルシタニア号を沈めたドイツ野郎を勝たせるわけにはいかない」

「^{シェルショック}戦争後遺症は経験したかな」

「…多少は」

「入院したことは」

「負傷してフランスの病院に一年ほど世話になりました」

「それほど長期なら、まだ後遺症が残っているのではないか。震えがきたり、酒を手放せなくなったり」

「そんな状態なら捜査官にはなれませんよ」

「しかし死体を見たり自動車事故の悲惨な現場を目撃したら、冷静さを失うのではないかな。戦争を思い出して」

実を言えば時折フラッシュバックがあった。晴天下でなんの理由もなく、いきなり戦場の最もグロテスクな光景が蘇る。そんな時は自分がシカゴの街並みを歩いているのが信じられなくなった。俺は悟られないよう小さく深呼吸をした。

「誰だって死体を見て冷静ではられません。犯罪事件なら特に」

「では？」

「司法に仕える者は、たとえ冷静でいられなくとも、必要とされる仕事をこなします。それがプロフェッショナルというものだ。もし俺たちが機械のように冷静だったら、被害者に同情することも寄り添うこともできません。それは良き警察官とは言えない」

「ふむ」

ほんのわずかだがアーミテッジの顔色が和らいだ。

「戦争から戻って、捜査局へ入ったのだな。弁護士を辞めた理由は」

「自分に能力があると気づいたからです」

「というと」

「ある事件で被害者が自殺したと報じられた。しかしおかしい点があった。被害者は右利きなのに喉の切り口が逆だったんです。つまり右から左へ切れていた。普通はそんな切り方をしません。それなのに部屋のドアが内側から閉ざされていたので密室と認定されてしまった。司法側の認識不足だ。

俺はその記事を書いた新聞記者を訪ね話を聞いた。すると被害者に恨みがある左利きの男が浮上した。事件のあった部屋を見に行ったら、ドアの鍵穴は細工されていた」

「どういう風に」

「馬鹿馬鹿しいほど簡単ですよ。その錠前は自動ロックで、鍵を浅く差し込んでも閉じられるようになっていた。『鍵を差しているのだから自分で閉じたのだ』というのは

真っ赤な嘘です。犯人は被害者を殺してから鍵穴に鍵を差し、それからドアを閉じた。それだけです」

「それで君はどうしたんだね」

「警察へ聞きに行ったら、現場に指紋が無かったと突っぱねられました。犯人がきれいに拭き取っていったんです。しかしそこがかえって不自然だ。なぜなら被害者が触ったに違いないところも指紋が無いんですから。自殺ならあり得ない」

「そうだろうな。だがそれでは決め手にならない」

「俺は容疑者のアリバイと服を調べると言いました。それに血溜まりには靴跡がわずかに残っていた。被害者の靴とは一致しない。なら、その靴を調べれば出所が分かる。それに血飛沫というやつは細かいので、着ていた物を全て処分しない限りどこかに跡が残っている。洗って綺麗にしたつもりでもね。その血の血液型を調べて被害者のものと一致すれば、有力な手掛かりになる」

「血痕だけでは証明にならんだろう」

「証拠というのは一つ一つは些細なものです。けれどたくさん集めれば、偶然の一致では片付けられない。そこが決め手になる。ズバリそれ一つだけというのは、探偵小説です。実際は多くの労力を使って犯人を^{ホシ}追い詰める。もちろん決定打は必要ですがね、陪審員を納得させるために」

「で、君はどうした」

「アリバイを記者と一緒に調べました。すると事件当夜パーティーへずっと出掛けていたというのは嘘だと分かった。証人は泥酔していたし、『居たような気がする』程度でした。それにそいつは容疑者から賄賂を貰っていた。金ではないが、良い酒をね。禁酒法制定前ですが、立派な詐称だ。容疑者は途中からパーティーを抜け出し、参加者が泥酔して記憶が曖昧になる頃合いを見計らって殺人に及んだ。そして現場の後始末をした後、ぬけぬけとパーティーへ戻ったんです。実に簡単だ。

それなのに警察は見え見えの小細工を真に受けて自殺と判断したんです。これに腹が立たずにいられますか。俺は事件記者に、俺の事は内密にするように言い、ネタはやる

から警察が動くまで何も書くなと言いました。スッパ抜けば容疑者が服を始末しちまう。

俺は警察に調べた事を洗いざらいしゃべったが門前払いだった。…ところが、その翌日容疑者が引っ立てられ、家宅捜査で被害者の血痕がついた服を発見された。それで「ジ・エンド」

教授は煙草を咥えると紙マッチで机を擦り、火を点けた。紫煙が優雅に漂う。

「——面白いな」

彼はゆっくり言った。

「君の得になるものは何もないのに、それだけの労力を費やすとは。記者はどうなったんだね」

「すぐに号外で特集記事です。見事に他社を出し抜きましたよ。おかげで俺がエージェントになった後でも良い情報源になってくれます。自分の名前が出るよりその方がいい」

「その事件と捜査局の関連は？」

「ある日いきなりシカゴ支局へ呼び出され、チーフと面会しました」

「テッド・パットナムだな」

「そうです。そこで言われた。『俺の下で働かせてやるから試験を受ける』とね」

「抜擢されたのではないのか」

「そう簡単にはいきません。司法長官にコネがあるか、真っ当に試験で合格するか。腕を買われただけじゃ捜査局へは入れない。ましてや俺の肌ならなおさらだ。周囲を納得させないと」

「うむ……………」

アーミテッジ教授はしばし瞑目した。煙草を挟んだ指が神経質に蠢く。そして灰皿に揉み消すと、デスクの引き出しから何か取り出した。

それは小さな円盤だった。直径が3インチほどの黒ずんだ石で出来ている。表面には牙の生えた奇怪な女の顔が彫られ、額の真ん中に目のような刻印がある。女の顔は――それが女だとして――ひどく醜く、異様に分厚い唇に残忍な笑みを浮かべ、上下に牙が交差していた。目は顔の半分ぐらいあって、こちらを凝視している。女というより怪物に近い。それでいて、どことなくユーモラスで親しみを覚える、奇妙な顔立ちだった。

円盤は摩耗していて形が完全な円ではなかった。石自体はざらついていたが、すり減ったせいで滑らかな印象を受ける。大昔の人間が装飾品に使うような代物だ。模様もいくらか消えかかっていたが、なぜかその三つの目に惹きつけられた。

教授はその妙な石のメダルを掌でもてあそんでいたが、

「……………よかろう」

眩くように言った。そしてこちらを見上げ、

「君に見てもらいたいものがある。運転は出来るかな」

「自分の車で来ました」

「ではそれに乗ろう」

俺は物問いたげに見たが、教授は何も言わなかった。それでピンときた。

これは試験の続きだ。

俺たちはロードスターに乗って大学図書館を後にした。

図書館を出る時、あのマスチフが教授を認めて激しく尻尾を振った。同じ犬とは思えない豹変ぶりだ。アーミテッジは犬の頭を親しげに撫で「元気かね、チップ」と呼んだ。獐^{チップ}猛な犬なのに欠片とは愛嬌がある。

「――なぜ倉庫の件が分かったんです」

ロードスターを発進させ、再度俺が問う。

教授はようやく答えた。

「ボストンの新聞に載ったのだ。小さな3面記事でな。そこには『埠頭倉庫でパーティーが開かれていたが、勘違いした警察が調べに来た』とだけあった。

私はシカゴへ行ったことがある。あの付近でパーティーを開くのにふさわしい場所はない。それに今時分『倉庫』と聞けば子供でも密造酒だと分かる。ということは『パーティー』なるもので飲まれていたのはお茶の類たぐいではない。

警察が勘違いしたのは倉庫に眠っている物ではなく、そこに参加していた者たちだ。おそらく市に影響力のある人物だろう。彼らなら揉み消すのは簡単なことだ。

そして君が来た。

テッド・パットナムは優秀な男だ。無能な者をそばに置くような真似はせん。そして私の要請に応じてくれる数少ない理解者でもある。テッドが部下を遊ばせておくはずがない。それなのに君が来たということは、しばらく遠ざけておく事情があったからだ。となれば埠頭倉庫と関わりがあるのは自明の理ではないかね。

君はあの件で捜査を指揮したが、誰かに裏切られたかで、責任を取らされた。そんなところだろう。…その目つきはなんだ？」

俺は呆れてものも言えなかった。

「…誰が図書館長ですって？」

「前をよく見たまえ。到着前に事故を起こされてはたまらん」

確かに彼は変人だ。しかも優秀ときている。これは相当癖のある事件ヤマのようだ。

<つづく>